

生死一大事血脈抄

文永九年二月十一日 五十一歳御作
与投遺房日淨

日 遊記之

御状委細披見せしめ候い畢んぬ、夫れ生死一大事血脈とは所謂妙法蓮華經是なり、其の故は釈迦多宝の二仏宝塔の中に於て上行菩薩に譲り給いて此の妙法蓮華經の五字過去遠劫より已來寸時も離れざる血脈なり、妙は死法は生なり此の生死の二法が十界の当体なり又此れを当体蓮華とも云うなり、天台云く「当に知るべし依正の因果は悉く是れ蓮華の法なり」と云云此の釈に依正と云うは生死なり生死之有れば因果又蓮華の法なる事明けし、伝教大師云く「生死の二法は一心の妙用有無の二道は本覺の真徳」と文、天地陰陽日月五星地獄乃至仏果、生死の二法に非ずと云うことなし、是くの如く生死も唯妙法蓮華經の生死なり、天台の止観に云く「起は是れ法性の起滅は是れ法性の滅」と云云、釈迦多宝の二仏も生死の二法なり、然れば久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華經と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華經と唱え奉る處を生死一大事の血脈とは云うなり、此の事但日蓮が弟子檀那等の肝要なり法華經を持つとは是なり、所詮臨終只今にありと解りて信心を致して南無妙法蓮華經と唱うる人を「是人命終為千仏授手、合不恐怖不墮惡趣」と説かれて候、悦ばし哉一仏二仏に非ず百仏二百仏に非ず千仏まで來迎し手を取り給はん事、歡喜の感涙押え難し、法華不信の者は「其人命終入阿鼻獄」と説かれたれば、定めて獄卒迎へに來つて手を取り候はんすらん淺淺淺淺、十王は裁断し俱生神は呵責せんか。今日蓮が弟子檀那等、南無妙法蓮華經と唱えん程の者は千仏の手を授け給はん事、譬えば蘇丹顔の手を出すか如くと思し食せ、過去に法華經の結縁強盛なる故に現在に此の經を受持す、未來に仏果を成就せん事疑有るべからず、過去の生死・現在の生死・未來の生死三世の生死に法華經を離れ切れざるを法華の血脈相承とは云うなり、謗法不信の者は「即斷一切世間仙種」とて仏に成るべき種子を断絶するが故に生死一大事の血脈之無きなり。

總じて日蓮が弟子檀那等、自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る處を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する處の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か、剩て日蓮が弟子の中に異体異心の者之有れば例せば城者として城を破るが如し、日本國の一切衆生に法華經を信せしめて仏に成る血脈を繼がしめんとするに、還つて日蓮を種種の難に合せ結句此の島まで流罪す、而るに貴辺・日蓮に隨順し又難に値い給う事・心中思ひ遣られて痛しく候ぞ、金は大火にも焼けず大水にも漂わらず、ちず鉄は水火共に堪えず、賢人は金の如く愚人は鉄の如し、貴辺眞實金に非ずや、法華經の金を持つ故か、經に云く「衆山の中に須弥山為第一、此の法華經も亦復是くの如し」又云く「火も焼くこと能はず水も漂わすこと能はず」云云、過去の宿縁追ひ來つて今日日蓮が弟子と成り給うか、釈迦多宝こそ御存候候らめ、「在在諸仏土常與師俱生」よも虚事候はじ。

殊に生死一大事の血脈相承の御尋ね先代未聞の事なり、貴貴、此の文に委悉なり能く心得させ給へ、只南無妙法蓮華經釈迦多宝上行菩薩血脈相承と修行し給へ、火は燒照を以て行と爲し、水は垢穢を淨るを以て行と爲し、風は塵埃を払ふを以て行と爲し、又人畜草木の爲に魂となるを以て行と爲し、大地は草木を生ずるを以て行と爲し、天は潤すを以て行と爲し、妙法蓮華經の五字も又是くの如し、本化地涌の利益是なり、上行菩薩末法今の時此の法門を弘めんが爲に御出現之れ有るべき由、經文には見え候へども如何が候やらん、上行菩薩出現すとやせん出現せずとやせん、日蓮先づ粗弘め候なり、相稱え相稱えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華經、臨終正念と祈念し給へ、生死一大事の血脈此れより外に全く求むることなかれ、煩惱即菩提、生死即涅槃とは是なり、信心の血脈なくば法華經を持つとも無益なり、委細の旨又申す可く候、恐恐謹言。

文永九年壬申二月十一日

桑門 日 蓮 花 押

最蓮房上人御返事

(御書)

P 1338

第九九条云、信と云ひ血脈と法水と云ふ事は同じ事なり、信が動ぜずば其筋目違ふべからざるなり、違はざる血脈法水は違ふべからず、夫とは世間には親の心を違はず出世には師匠の心中を違はざるが血脈法水の直しきなり、高祖已來の信心を違へざる時は我等が色心妙法蓮華經の色心なり、此信心の違ふ時は、我等色心凡夫なるが故に即身成仏の血脈なるべからず一人一日中八億四千念々中所作皆是三途業因。

○註解
信心と血脈と法水とは要するに同じ事なるなり、信心は信行者にあり、此信心に依りて御本仏より法水を受く、其法水の本仏より信者に通ふ有様は、人体に血液の循環する如きものなるに依りて信心に依りて法水を伝通する所を血脈相承と云ふが故に、信心は永劫にも動揺すべきものにあらず、猶亂すべきものにあらず、若し信が動けば其法水は絶えて來ることなし、愛に強いて絶えずと云は、其は濁りたる亂れたる血脈法水なれば、猶亂法断絶なり、信心の動かざる所には幾世を経ても正しき血脈系統を有し、血液活潑に運行す、其は世間にて云へば子は親の心に違はず祖先の定めたる家態を乱さぬが其家の血統正しきが如く、仏法には師匠の意中に違はぬが血脈の正しき法水の清らかなるものなり、仏法の大師匠たる高祖日蓮大師開山日興上人日來の信心を少しも踏み違へぬ時、未だたる我等の俗惡不淨の心も其善清淨の妙法蓮華經の色心となるなり、此色心の転換も只偏に淨信篤行の要訣にあり、若し此の要訣を違はずして不善不淨の邪信迷信となりて、任意に違ふ時は法水の通路徒らに墜塞せられて我等元の儘の粗凡夫の色心なれば、即身成仏の血脈を承くべき資格消滅せり、悲しむべき事どもなり、惟無三昧経などにも一日一宿に八億四千万の念ありて念少しも息まず、惡念は惡果を招き善念は善果を招くとあり、中に凡夫は惡念をのみ起すものなれば、不退の修業を積みて本仏の慈願に乘すべき事を怠るべからざるなり。

第六章 當家相承ヲ論ス

第五十五節 驥尾日守カ因果一念及靈山別付ヲ以テ當家相承ノ大事ナリト云フ妄誕ヲ駁ス。

末法觀心論第一條ニ云ク我大師嫡々相承傳法抄ナル者ハ因果一念宗之大事是也豈ニ習ハサル可クニヤ是ハ此レ唯授一人之稟承ニシテ即靈山別付結要之大事ト云也此他ニ會テ大事之法門有ル事無ケン此ヲ當家兩箇之大事ト云也等ト云々。

駁シテ云ク日守カ本因妙百六箇兩抄ヲ以テ興門ノ正嫡唯授一人ノ相承ハ獨尊門要法寺ニ存スルカ如ク詩稱スルハ所謂盲人探象ノ愚案ノミ、何トナレニ唯授一人嫡々血脈相承ニモ別付惣付ノ二箇アリ、其別付ト者則法體相承ニシテ惣付者法門相承ナリ、而シテ法體別付ヲ受ケ玉ヒタル師ヲ眞ノ唯授一人正嫡血脈附法ノ大導師ト云フヘシ。又法門惣付ハ宗祖開山ノ弟子且那タリシ者一人トシテ之ヲ受ケサルハナシ蓋シ法門惣付ノミヲ受ケタル者ハ遂ニハ所信ノ法體ニ迷惑シテ己義ヲ捏造シ宗祖開山ノ正義ニ違背ス、例セハ宗祖御在世ニ數多ノ弟子アリト雖トモ獨尊開山ノ法體別付ノ相承ヲ受ケ玉ヒ其他ハ法門惣付ノ相承クミ受ケシカ故ニ宗祖滅後各々己義ヲ捏造シ像佛等ヲ建立シ以テ本尊トシタルカ如シ。今亦要法寺モ如斯法門惣付ハ受ケタルト雖トモ法體別付ノ相承ナキカ故ニ其開基尊師已來歷代ノ眞主所信ノ法體ニ迷惑シ己義ヲ構へ像佛ヲ建立シタル者多クアリ是即日守カ山ニ法體別付ノ相承ナキコト最モ見易キ現證ナリ、吾大石寺ハ宗祖開山ヨリ唯授一人法體別付ノ血脈ヲ紹繼スルヲ以テ五十有餘代ノ今日ニ至ルモ所信ノ法體確立シテ毫モ異義ヲ構へタル者一人モナシ。而シテ別付ノ法體ト者則吾山ニ秘藏スル本門戒壇ノ大御本尊是ナリ、故ニ開山上人ヨリ日師ヘノ付屬書ニ云ク日興宛身所給弘安二年大本尊日自授與之云々、此法體相承ヲ受ケルニ付キ尙唯授一人金口嫡々相承ナルモノアリ此金口嫡々相承ヲ受ケサレハ決シテ本尊ノ書寫ヲナスコト能ハス、是ニ於テ要法寺開基尊師ハ其在世自ラ建立セシ寺院ハ勿論ソノ檀信徒ヘ對シテモ一幅ノ本尊タモ書寫シ授與セザリシト是亦要法寺ニ別付法體相承ナキ現證ト云フヘシ。